



中村浩史(東京)「銀翼」

SKY GRAFFITI 2013

一般公募部門 講評と展望

日本航空写真家協会会長 瀬尾 央

JAAP 写真展「SKY GRAFFITI 2013」を開催するにあたり、一般公募を行い、東京浜松町で、応募者のうちの希望者とともに合同審査会を行った。これは、通常のコンテストにはない選考の方法だろう。

なぜ応募者も含めて合同で審査するのか。一義的には、みんなで作る写真展、というコンセプトを生かしたいからである。応募点数にして 400 点に届かない、なにせ規模の小さな公募である。どの局面にも一般参加者に加わってもらいたのだ。また、

全応募作を回覧すると、センスある人であれば、全作品の中で自作品の作品性のグレードも手に取るようになる。ヤラレタとか、これはカナワシとか、上手いなあ、という率直な感想が、きっと次作への大きな影響力になると思う。審査する側ですら、そう思うのであるから、参加者は相当な刺激を受けたのではあるまいか。要は、もまれ合う場を作りたいということだ。これに過ぎる勉強は、そうあるものではない。

合同審査会では、まず参加者にそれぞれ

付箋を 3 枚お渡しした。良いと思われる作品に付けてもらう。当然、自作品に付けてもかまわない。だが、制限時間後、自他区別なく、それはなぜ良いかを語ってもらう。その後、審査員も加わって付箋を増やした。

自薦もありだから、居合わせて声が大きいと選ばれるか？ それは無視しない。当落線上の、例えば 50 点内外となったとき、この会に出席する積極性は、わずかだが有効なポイントになるかもしれない。

今回は応募作品に上限枚数を設けなかつ



た。平均すれば1人5点内外の応募だったが、コマ続きの2〜3点と見なされるような作品を応募してくる例が散見された。応募上限枚数を制限しなかったのは、言外に、「選球眼」も問うぞ、と言いたいところがあるからである。そうした応募者は、総じて力量不足と見受けられた。「なぜ、これが良いのか」語れるのであれば、まずは自ら厳選したものを送ってほしい。

JAAPが本格的に公募を始め、アマプロ同じ土俵で作品発表を行うのは、これが3回目である。3年の経験は結構重い。画柄や画像の調子を見ただけで、撮影者が誰か類推でき、それはほぼ間違いない結果となっている。

その1人、佐々木豊さん(大阪)は「月光」を含め7点応募であったろうか。前回公募もそうであったが、1点として類似のもの



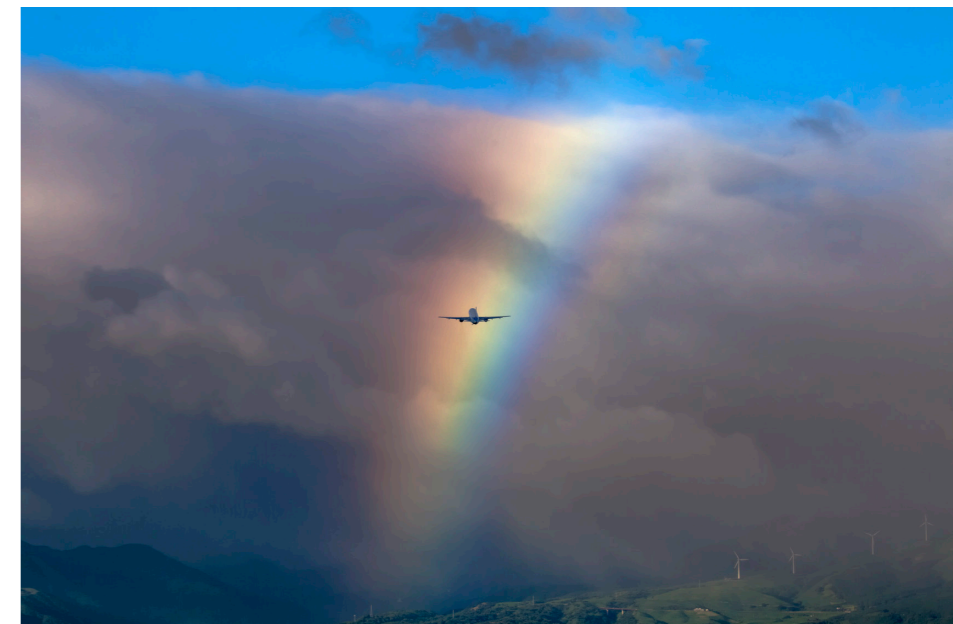
浦川修一(東京)「しんしん」

佐々木豊(大阪)「月光」
がないうえ、破綻なく、完成度高く、全作品に複数の付箋がついたのである。どれも作品的存在感は群を抜いており、その中からたった1点の展示作品を選ぶことが惜しいとさえ思えたのであった。

注目できる画を

400点近い全作品を概観すると、2L判の小さな画像から、何かしら訴えてくる作品にぽつぽつと遭遇する。目立つというか、吸引力があるというか。一般的にも公募審査の場合は、砂利の中から宝石の原石を探し出すようなところがあって、まずは目立たなければいけない。

圧倒的な撮影技術、幸運この上ない光景、自然現象との遭遇、その撮影者でしかなしえない、しかし独りよがりでない発見、切り取り方、画の裏側に見える撮影現場へ到



片山研吾(熊本)「Over the Rainbow」



小笠原宏司(神奈川)「黄昏の熊本」



近藤昇(愛知)「F-5E 飛ぶ台湾の空」

達した努力・・・といったものだろう。

まずは、井口博正さん(東京)の、完璧にメインローターを回した空撮風スローシャッターによる「Wind Stream」が目立った。70-200mm で意欲的に 1/13 だという。

細淵達也さん(沖縄)の、一息画像補正の要があるだろうけれども、直上の丸い虹「レインボー・リング・フライト」は珍しいといえるだろう。虹のスペクトラムはやはり写真的だ。

片山研吾さん(熊本)の「Over the Rainbow」は、やはり虹だが、日々空港に通い詰めている成果だろう。虹は大きくとも機影のボリュームが小さいことが、逆に存在感をもたらしている。翼上の虹については、正木浩さん(千葉)の「翼上の天国」が盛大だった。が、意図的に撮ったというより、撮れてしまった感が強い。それをぬぐい去る一息の努力がほしい。

小笠原宏司さん(神奈川)の、秋冬の熊本の定石、沈む太陽と B.767 による「黄昏の熊本」の的確性は高い。即応する技術がないと得られないだろう。

近藤昇さん(愛知)の「F-5E 飛ぶ台湾の空」は、補正の必要を感じるが、外国に出かけたものの、悪条件をテコに画に仕立て上げたところが努力賞と思える。

また、フレーミングに難点はあったが、下宇宿和男さん(鹿児島)の鹿児島空港から見る激しい噴煙「新燃岳噴煙の鹿児島空港」や、梅村廣さん(沖縄)の、自然の奥深さをどこかに想起させる日没間際の海と飛行機「残照」も、画が醸し出す現象の奥の意味的な重みを感じられた。

的確なシャッターチャンスでは、松下将士さん(愛知)の、計算尽くで狙っていったと思われる「十三夜の空へ」が、光の具合とともに目を引いた。

長時間露光におけるシャッターチャンスでは、見る人に理解を求めるという意味でタイトルにいささか難を感じるが、上河聡さん(東京)の「ラッシュアワーの主人公」も興味深かった。だが、これが飽きられる手口にならないようにしてほしい。

そもそも人は、太古より光り輝くものに憧れを持ち続けた。写真は今、それを直接的に見せることができる。中川和幸さん(神奈川)の雨上がりの誘導路か、「Sparkle」はその最たるものだろうし、中村浩史さん(東京)による「銀翼」は逆に露光を切りつめた中で輝きを出し、戦闘機の強さを表した。また、池田周一郎さん(東京)の「Blue Moment」は、外光よりキャビン窓が明るくなる頃合いで、羽田 D 滑走路棧橋部の



井口博正(東京)「Wind Stream」

ステンレス柱が同じように光るところを捉え、写真的であることを感じさせた。

降雪の千歳で撮影された浦川修一さん(東京)の「しんしん」は、無理矢理対象に肉薄しせず、スタンスからも寒さを呼ぶところがいい。逆の季節感では、山納裕幸さん(千葉)による下地島における「夏の日」の午後」が沖縄らしさを表していた。下地島通いの常連だが、次は明らかなブレークスルーがほしい。

着眼点では、笠巻敏勇さん(新潟)の「戦士たちの休息」が票を集めた。シンメトリーな構図の浅い絞りのモノクロ写真だが、F/A-18 の風防周りの描写、特にハイライトの立て方が作品性の鍵となるだろう。

こうして入選作品を選んだが、まだこの時点では内定である。

選択の分かれ目

合同審査会に参加されたが、狭き門で自作が選ばれなかった応募者もいる。

応募作品の裏側に添附された応募票の各種データを読んでから、ようやく力量的に「コレ凄いじゃん」というのは、一瞬では目立たない。じっくり見なければ、良さが分からないということだ。その点、そうした作品はなるべく審査員選で拾

いたいが、既知の撮影者であれば、応募作よりももっと凄い、より写真展に適合する作品を知っていることが多い。Facebook などで見ればなおのことだ。なぜあちらを出さなかったのかと残念に思う。

また、まず真似できそうもない圧倒的な画像処理能力を見せる応募者もいる。技術

細淵達也(沖縄)「レインボー・リング・フライト」



塚原徹「2013」(初日の出)
高木進「思わず見上げる砂像」(鳥取砂丘)
奥村展「Halla Kitten」(韓国)
山内伸之「守護神の舞」
関崎晋史「かすむ闇」
片桐桂一「昴」
神田泰之「vaper」「薔薇」
藤波靖「Mt.FUJI」
妻木利浩「ラッシュアワー」
山岸佳雄「茜を招き」「クロスポイント」
西田俊介「Front Line」
伊藤晴隆「春の大地に舞い戻る」
島崎純一「夜と昼の狭間」
佐藤広「夕暮れ時」「ヨーロピアン・フォーメーション」
副田茂男「雲のじゅうたん」
萩野慎治「陽輝中の飛行艇 US-1」
土田茂治「救いの翼」
景山正和「光跡」
豊田将之「躍動」
高木進「帰って来たぞ〜」
武田義則「黄昏時の大渋滞」
「夕暮れのランブイン」
児玉尚昭「離水！」
植木良太「Vaper」
近藤晃次「ARASHI JET」
延原真「RW34R landing at NRT」他
山舘俊隆「Heading North」
「点と線」

は高く個性は強烈だが、作画スタイルがあまりに個性的であれば前作も記憶にあり、2度目はいいか、という印象も生まれる。それがいかにも惜しい。公募呼びかけ団体としては、常に底辺の広がり求めていきたいという希望がある。常連には常連の場を設定することも考えてはいるが、それゆえ発表の場は、公募以外の個展や出版などに求めた方が、撮影者の力量の全貌が分かっていいようにも思う。

ひとつの対象やテーマを追い求めている応募者もいる。それは尊敬に値するし、この撮影者の明確な守備範囲だと理解もしている。しかし同時に、「おや、前回も同じだったね」という印象がついてまわる。前回入選者も、同じ撮影対象だがこんなに写真的に新しさがある、といえるものを提示してほしい。今回は特に展示数が少ない会場だということも、判断を左右している。

今回展示には至らなかったが、上欄に記憶に残る撮影者と作品を挙げておこう。もし、昨年から偶数年に始めることにした新宿展「SKY MOMENTS」であれば、上欄のみなさんの作品も展示作になったことだろう。

記憶に残る作品には、入選者の入選作以外の作品が多数ある。志が高く、安定的な力量があることが伝わってくる。



下宇宿和男(鹿児島)「新燃岳噴煙の鹿児島空港」



梅村廣(沖縄)「残照」



正木浩(千葉)「翼上の天国」

人様に見せる観念を

いつもながら思うのだが、そもそも応募総数の6割は作品性に乏しいといえる。こんな写真を撮りました、ではなく、撮れていました、という追認しか感じられないのだ。「撮った」か「撮れていた」かは写真を見るなり分かる。積極的な意図の発露がほしい。

まずは、例えば画面にない尾翼の一部は、切ったのか、切れたのか。ブラしたのか、ブレたのか。傾けたのか、傾いたのか、初步的な確認をしてほしい。そこでの意図の有無は手に取るように分かる。同様に、他の人に見せるものという観念がほしい。人様に見せるという意志があるのであれば、あるべき姿としては写真技術そのものよりも、普通の、当たり前の、社会性が問われているような気がする。先に述べた「選球眼」同様、そういうことにもう少し神経を使っていたらと、何かが変わるはずだ。

精緻なプリントを

さて、内定から入選が確定するには、もうひとつのハードルがある。展示に耐える長辺 505mm (200dpi) の画像データの作成である。これを見ると、画像補正は大変修練を要する作業だということが分かる。入選の喜びによって？肩に力が入りすぎ、すなわちオーバーコントロールな画像補正や、経験のない大判プリントにより破綻が目につく、という例が多い。一部には、撮影機材の性能が大きなトリミングに耐えられないものもある。もし、出品作品そのもので審査する大規模な公募展であれば、アラの方が目について、選ばれることは難しかったのではないかと思える。あるべきアプローチとしては、この画はこうあって然るべき、という先読みができるようにすることである。これは、現場での撮影でも共通する心構えだろう。

プリント技術的には、2L 判応募作を、気軽な調整もされていない自宅の PC 環境やプリンターで作るのではなく、専門業者に依頼してプリントする、という試みも必要と思う。

入選内定作品については、展示用画像データとともに撮影時のオリジナル RAW も一緒に提出していただいた。そして必要あるものについては、JAAP の側で最初から作り直した。

会友推挙も

写真展主催者としては、今後の展望とし



松下将士(愛知)「十三夜の空へ」



上河聡(東京)「ラッシュアワーの主人公」



中川和幸(神奈川)「Sparkle」

て、まずは応募者・応募点数の3倍増を目指したい。また、自衛隊航空祭においては、あれほど多数の航空機写真愛好家が撮影に熱中しているにもかかわらず、軍用機関係の応募が少ない。写真展の全体構成を考えると、もっと戦闘機などの機動シーンがほしいところだ。この点についても奮起を促したい。

さて、JAAP は吹けば飛ぶような任意団体ではあるが、それなりに会則も整備している。会は、航空を活動の場とする職業写真家の団体という原則があり、それに適合した正会員によって動いている。しかし、その原則はいつまで維持できるのだろう。飛行機写真によって稼ぐということだけがプロの証であれば、さしたる意味はない。そこには、作品性との関係が薄いからだ。常に見応えのある写真作品を提示できるか否かは、アマプロ関係ないのだ。

JAAP の会則には、会友という制度が設けてある。写真展は、みんなで一緒に作ろうというコンセプトでやっているが、そこを一層明確化するために、今後は会友を選んでいきたいと思う。

会友は、低額の入会金・年会費を頂き、写真展の店番なども応分の参加をさせていただくことになるが、偶数年開催の「SKY MOMENTS」展においては、無鑑査(無審査)の作品発表を認めることにする。また、JAAP のホームページにある「GALLERY」および Facebook で随時作品発表をさせていただくこともできる。いつの日か実現させるその他のプロジェクトについても、率先して参加していただくことになる。

まだ私個人の考えだが、過去から今回に至る優秀な応募作を見させていただいた中で、佐々木豊さん(大阪)、中村浩史さん(東京)のお2人を会友に推挙したいと考えている。正式には、これからの討論を経て JAAP 総会で決めることである。

プロにもタスク

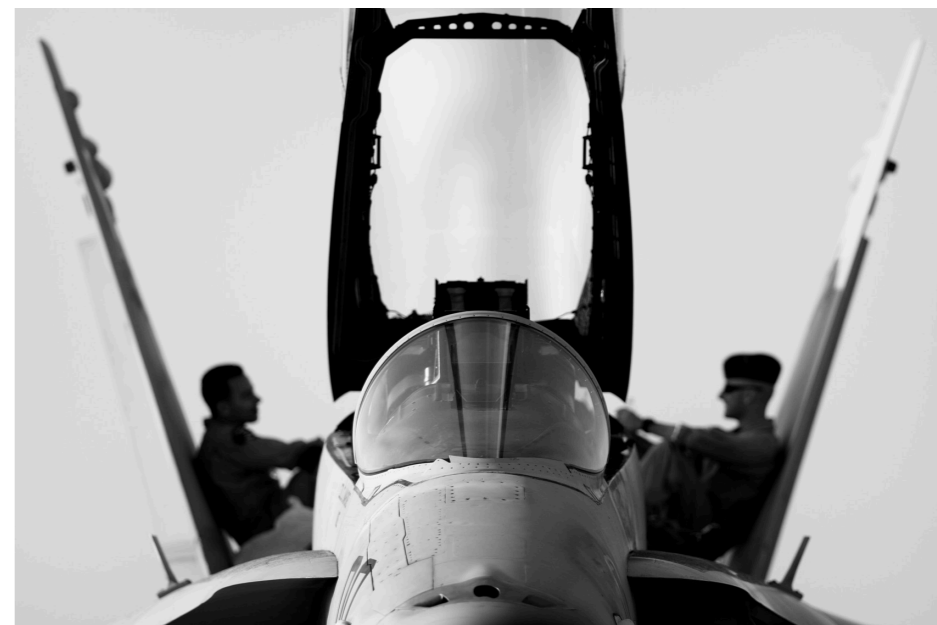
さて大阪展を終えると、2014 年写真展「SKY MOMENTS」の準備が始まる。次回は一般公募部門はやや門戸が広い。今回選に漏れても諦めないでアプローチしてほしいし、JAAP では SM14 を目指し、内容の濃い撮影会や講習会を企画していきたいと思う。意欲的な応募者の作品を見せられると、正直なところプロの会員がこのままでいいのか、と自戒の念も生まれる。SM14 では、JAAP 会員には、反論があろうとも、少しハードルの高いタスクを課そうと思っている。乞うご期待である。



山納裕幸(千葉)「夏の日の午後」



池田周一郎(東京)「Blue Moment」



笠巻敏勇(新潟)「戦士たちの休息」